



CQM(超短期経済予測モデル)

稲田義久(APIR 研究統括)

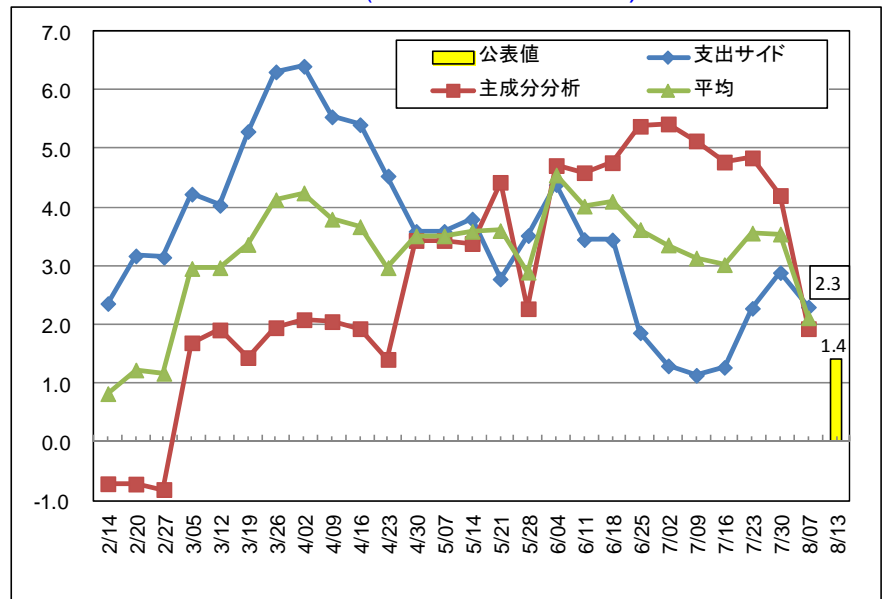
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:inada-y@apir.or.jp

日本経済(週次)予測(2012年8月14日)

ポイント

- ▶GDP1 次速報値によれば、4-6 月期の実質 GDP 成長率は1-3 月期+5.5%から+1.4%へと大幅に減速した。4 期連続のプラス成長を記録したが、市場コンセンサスから下振れた。
- ▶1-3 月期が閏年効果によりかさ上げ、4-6 月期はその反動で低く出ていると考えれば、平均すれば 2012 年前半の日本経済は堅調に推移しているといえよう。
- ▶CQM の予測動態(支出サイド)を振り返ると、成長率予測は 4 月データが公表される 6 月初旬には+3%台半ばで推移したが、5 月データが更新される 7 月初旬には+1%台に低下し、最終週は+2.3%を予測した。
- ▶今週の CQM(支出サイド)は、7-9 月期実質 GDP 成長率を-0.4%と予測する。今後については、政策効果が剥落し、輸出の高い伸びもしばらく期待しにくい。この結果、2012 年後半の日本経済はほぼゼロ成長局面に入るとみている。

CQM 予測の動態：実質 GDP 成長率
2012Q2 (%、前期比年率換算)



<4-6 月期実質 GDP1 次速報値市場コンセンサスから下振れ、平均すれば年前半は高成長を維持>

8月13日発表のGDP1次速報値によれば、4-6月期の実質GDP成長率(以下、前期比年率ベース)は1-3月期の+5.5%(改定値)から+1.4%へと大幅に減速した。4期連続のプラス成長を記録したが、市場コンセンサス(ESPフォーキャスト8月調査：前期比年率+2.21%)から下振れた。1-3月期が閏年効果によりかさ上げされており、4-6月期はその反動で低く出ていると考えれば、平均すれば2012年前半の日本経済は震災の影響を乗り越えて堅調に推移しているといえよう。

4-6月期は政策効果や復興需要の影響で内需が比較的堅調なパフォーマンスを維持したが、外需が再び成長率引き下げ要因となったため、1-3月期から大幅な減速となった。ただ内需は堅調に推移したものの、民間最終消費支出の伸びが+0.6%(1-3月期：+5.0%)にとどまったため、成長率の大幅減速につながった。

CQMの予測動態(支出サイド)を振り返ると、4-6月期の実質GDP成長率予測は4月データが公表される6月初旬には+3%台半ばで推移したが、5月データが更新される7月初旬には+1%台に低下し、最終週は+2.3%を予測した。またそれまで高い成長率予測を示していた主成分分析モデルも最終週には+1.9%に低下した。両モデルによる予測平均値は+2.1%となった。

今週(8/14)のCQM(支出サイド)は、7-9月期実質GDP成長率を-0.4%と予測する。今後については、エコカー補助金が終了することに加え復興需要の押し上げ効果も徐々に剥落し、4-6月期のEU経済が2期連続の不調となったように輸出の高い伸びもしばらく期待しにくい。この結果、2012年後半の日本経済はほぼゼロ成長局面に入るとみている。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6441-0550